



だいすきな
おばあちゃん

みずきあかね

だいすきなおばあちゃん

「わたしはおばあちゃんがだいすきです。」

げんこう用紙に一行書いて手が止まってしまった。

だい名は「だいすきなおばあちゃん」

学校の宿題で家族のことを書くことになったの。

お父さんお母さんや兄弟のこともいいけど、おじいちゃんおばあちゃんのことでもいいよって先生が言った。

だから、おばあちゃんのことを書くことにしたんだ。

おばあちゃんは好きだけど、作文に書くのはむずかしい。

どこが好きなのか考えていたら、わるいことしか思いつかなかった。

だっておばあちゃんは、畑仕事で顔はまっ黒でしわくちゃ。

手はごつごつしている。

その手でなでられるとなんだかはずかしい。

けいちゃんちのおばあちゃんはいつもきれいで、あそびにいくとケーキを焼いてくれる。

うちのおばあちゃんもあんなにきれいな手だったらいいのになあ。

月曜日に出してって先生言ったけど、ちゃんと書けるか心配になってきた。

つぎの日、三時のおやつにおかしを買っておばあちゃんの畑に行った。

「おばあちゃん、おやつ食べようよ！」

おばあちゃんはおわをおいて、歩いてきた。

まっ黒な顔をくしゃくしゃにして笑うと銀歯がきらりと光るのが、かっこわるい。

「おお、ようきたね」

向こう側の畑のおばあちゃんが手をふっている。

「さよちゃん、つくしいらんかえ」

手に持ったビニール袋につくしがいっぱい入っている。おばあちゃんはわらって答えた。

「ありがとう。お茶のんでくかあ」

のんびりとおばあちゃんが答えると、後ろからちょうしがいい声がした。

「そりゃええな」

大工さんが笑いながらおりてきた。

おばあちゃんの畑のうしろにおうちが建てている途中なんだ。

今度は向こうの方の畑からおじいちゃんやおばあちゃんが、

「さっき山行ってきたで。わらびやるわ」

「見かけたで、たけのこもってきたわ」

五人も集まってきてびっくり。おばあちゃん人気ものなんだ。

おばあちゃんがござをしくと、みんなそこにすわった。

それからおばあちゃんは、ごつごつした手で畑の苺をつむと、井戸の水で洗って透明のイチゴパックに入れた。

私はおばあちゃんの手伝いでポットのお茶を紙コップに入れてみんなに渡した。

おばあちゃんもにこにこ、みんなもにこにこ。

その顔を見たら私もすごくうれしくなって、持ってきたお菓子をくばった。

みんなよろこんでくれた。

「おまえんところ、こんなええ孫がおるんか！」

大工さんがおおきな声で言うと、

「おおきゅうなってええ娘さんになったわ。」

つくしを持ってきてくれたおばあちゃんが笑った。

私ははずかしくて肩をすぼめていると、大きい声でおばあちゃんが言った。

「うちのまごよりやさしい子はおらんよ。」

「そりゃ、自分とこの子やからやわ。ほんにおめえさんの若いころにそっくりや。」

大工さんは笑った。

するとまわりのみんなも私を見て「うんうん」ってうなづいたから、私はもっとはずかしくなった。

それから、大工さんやおじいちゃんおばあちゃんから、このあたりの昔のことを聞いた。

このあたりって今は畑だけど、昔は河原だったんだって！

くわの木がたくさんあって、くわの実を食べたりしたんだって。

くわの実ってどんな味かな？

大工さんから戦争の話も聞いたけど、やっぱりこわいなって思った。

そのあいだおばあちゃんは、ずっとやさしくわらっていた。

家に帰ってすぐ、書きかけのげんこう用紙をだした。

『わたしはおばあちゃん大好きです。

なぜなら、おばあちゃんはみんなにやさしいからです。

わたしにもやさしくしてくれます。

だから、わたしはおばあちゃんみたいに、みんなにやさしくできる人になりたいです。』

原稿用紙をたたんでランドセルに入れると、おばあちゃんの声がした。

「ゆいちゃん、ごはんだよ」

「はあい！」

台所から、たけのこごはんのいいにおいがしてきた。

おしまい